

下
節 著

ひとりぼっちの戦い

中河与一の光と影

金剛出版

著者・森下 節（本名裕）

大正9年3月，北海道夕張市紅葉山出身。
新聞雑誌記者を経て，文筆生活にはいる。
主なる著作に〈小説エノケン〉（読売新聞社刊），〈肅清〉（実業之日本社刊），〈同人雑誌入門〉（仙石出版）などがある。日本文芸家協会会員。全国同人雑誌作家協会常務理事。文芸同人誌〈芸文〉を主宰して二十年，後進の育成に当る。

ひとりぼっちの戦い

定価 一・二〇〇円

昭和五十六年十二月十日 印刷
昭和五十六年十二月十五日 発行

著 者 森下 節

発行者 淵上 祐史

印刷所 慶昌堂印刷

製本所 河上製本

発行所 株式会社 金剛出版

東京都文京区本道一ノ五ノ一六

電話 八一五一六四一五（代表）

振替口座・東京二一三四八四八番

落丁・乱丁はお取替え致します

ISBN4-7724-0139-3 C0093

森下 節 著

ひとつのぼつてんの戦い

—— 中河与一の光と影

金剛出版

もくじ

第一章	誤伝	7
第二章	箱根山荘	29
第三章	モデルの証明	59
第四章	明暗	82
第五章	証言	101
第六章	ブラック・リスト事件	121
第七章	偽証	150
第八章	変節	175
第九章	情報局	194
第十章	晩鐘	218
終章	孤舟	227

そらてい・田中淑恵

ひとりぼっちの戦い

第一章 誤 伝

——昭和五十五年十月某日。

私は久し振りに三鷹の丹羽文雄邸を訪れた。その日は珍しくよく晴れ上った、秋の日の午後であった。

丹羽邸は、三鷹駅から五、六分の閑静な住宅街の一角にある。私には歩き馴れた道だった。中央線の線路に沿って細く狭まった玉川上水が流れている。その静かな道をゆくたびに、私の胸はなぜとはなく高鳴ったものである。

その胸の高まりは、二十余年を経た今も変わらない。

私は今でも二十余年前、初めて丹羽邸を訪れた日のことを、つい昨日のことにように鮮やかに思い起すことができる。

——それはある暑い盛りの夏の日のことだった。

汗っかきの私は駅頭に立ったときから、全身濡れたようになっていた。ただでさえ汗っかきの上に、常ならぬ緊張感のせいか一層汗を呼んだのにちがいはなかった。

駅前に果物店があった。

店頭にスイカが山のように並べられていた。ふと私はスイカを買う気になった。うだるような暑さのせいもあった。不意に食欲をそそられた。恰好な手土産だという考えがわいた。いいときスイカが舞い込んできた。そう言って欲ばれるのではないか、と私は思ったのである。

しかし、いま思うとずいぶん野暮ったらしい手土産だったという、ほろ苦い思いが先に立つ。二十余年前の私には、そんな田舎臭い考えしかなかったとみえる。それとも懐中の乏しい文学青年にしてみれば、それが精一杯の手土産のつもりであったのかもしれない。そのずしりとしたスイカの重量感が、二十余年を経た今も、私のなかに残っている。

そのとき以来、何度この同じ道を胸の高鳴りを抑えながら歩いたことだろう。丹羽文雄は、野暮なスイカ野郎とも思わずに、いつ行っても快く私を迎えてくれた。今にして思えば、それもまた気になることであった。

「わしは、ずっと昼型なんだよ」

いつか何かの折り丹羽文雄はそう言ったことがある。作家は夜だけ仕事をするもの、とばかり思い込んでいた迂闊さが私にはあった。執筆時間に夜型と昼型とがあることを、そのとき私は初めて知った。

この夏、私は雑誌「自由」で、中河与一に関するある小文を発表していた。それには思いがけなく多くの反響があった。

文壇での中河与一の立場はあまり芳しいものではない。あまりどころかむしろ文壇じゅうのきらわれ者、と言ってもいい境遇の下におかれていた。文壇人の中には、憎惡の色をあらわにしながら、

「何だ！ 中河与一はまだ生きていたのか?！」

と、だれ憚る態もなくそう言い切る者さえいる。

しかし、それはまだいい方であった。ある者は憎々し気に、

「文壇の裏切者！」

と、半ば公然と罵る者がある。裏切者とはこと穏やかではなかった。

中河与一がなぜそういう立場におかれたのか、私は長い間知らずにいた。私のなかの中

河与一は、日本文学の一時代を画した、新感覚派作家の一人として聳え立つ存在であった。その確立した存在のなかで私は、中河与一にまつわる黒い噂が、汚れた一滴の染みのように広がっているのを知った。

だが噂はともかく作家を取るか、作品それ自体を取るかといえば、私としては作品を取る方を選びたいと思っていた。代表作『天の夕顔』は十分それに値する作品であった。

極端にいうなら作家はどうでもよかった。ただ作品を愛し信ずることが出来ればそれでいいと、私は思いつづけた。

また『天の夕顔』はそれなりに高い評価を得た作品でもあった。とりわけ海外での評価が高かった。日本の数ある文学作品の中で、英・仏・米・独・中国・スペインなどの各国語で訳され、国際的規模で紹介された作品はそうざらにはない。

だが、文壇には、その輝かしい評価をえた作品にも、黒い噂がまつわりついていた。

もちろん中河与一には、これ以外にも多くの高い世評を受けた作品がある。もし噂が本当なら『天の夕顔』一作だけの作家で、おわりになったとしても不思議ではない。噂は作家生命を断ちかねない程ひどいものであった。

「……あれは代作、盗作だ！」

と、言うのである。

もっとも『天の夕顔』をめぐる、いくつかのいやな噂はあった。中でもモデル事件をめぐる噂は際立ったものだった。それらの噂の程度がいかなるものであるかは、文壇の末席にいる私のところまで聞えてくるところをみれば、他はおよその見当がつけられる。

それにしてもそれはいかにも不愉快な噂であった。

「いったい中河与一に何があったのだらう？」

私のなかに中河与一に対する、文学的観点を変えようとする、かすかな動きが芽生え始めた。

それは噂を否定することから始まろうとしていた。私はどちらかといえば、自ら確かめようのない噂のたぐいは、信じない方であった。噂はあくまでも噂にしかすぎない。それを頭から信じる方がどうかしているのである。

私はそのとき以来、少しずつ中河与一についての取材を始めた。中河与一に関するものには、貪欲なほど眼を凝らすようになった。

それは中河与一が蒙った冤罪への挑戦でも、義憤でも同情でも、ましてや正義感でもなかった。ただしきりに私を駆りたてたものは、たったひとつの真実を突き止めたいという、

獵犬のような文学的衝動だけだったような気がする。

噂とはいわば霧のようなものであった。

暗鬱な霧の中では何も見えない。しかし、その中で何かがあったことだけは確かなのだ。私はそう思ったとき一瞬、自分が濃い霧の中に放り出されたような気がした。噂は霧の中で微細な粒子になっていた。掴みどころがなかった。

だが、その掴みどころのない微細な粒子は、どこかで結合され繋がっているはずだと思った。私は根気よくその粒子を探し始めた。

霧の道は四十二年もの遠い彼方にまでつづいていた。中河与一が『天の夕顔』を発表したのは、昭和十三年のことである。そこまで戻り着かない限り、私の探し求める霧の粒子は見つからないだろう。

ところが私はそこまで行かないうちに、一つの粒子に突き当たった。それが私の尋ねる初原の粒子であるかどうかは別として、一つの確かな粒子であることだけは間違いなかった。その粒子を私は平野謙の文章の中で見つけた。

平野謙は『日本文学報国会の成立』という一文の中で、次のように書いている。

へ(略) こういう運命を最も象徴的にあらわすものとして、一作家によるブラック・リスト提出という一事件があった。文学者を三段にわけて、黒、半黒、白の符牒をつけたブラック・リストを、一作家が情報局に提出したという噂が、当時ひろがったのである。黒は左翼的、半黒は自由主義的とでもいうつもりだったろう。果して一作家がそういうブラック・リストを作成して、情報局に提出したかどうかは私は知らぬ。しかし、現にそういうブラック・リストが謄写版刷りされていたことは、私自身もこれを目撃している。私はそれを上田課長の机の上に瞥見したのである。』

以上の文章がいつどのようにして発表されたものかわからない。私はこれを平野謙全集第五卷四十六頁にある「日本文学報国会の成立」という一文の中で見たのである。

その同じ文章によると平野謙は、一九四一年一月から一九四三年五月までのほぼ二年半ほどの間、情報局の常勤嘱託であったことがわかった。

「ブラック・リスト事件」

いいたいそれは何だろう。

それまで私は中河与一にまつわる、様々な噂は聞いていた。だが、ブラック・リスト事

件という、いかにも犯罪めいた話を耳にしたのは初めてであった。

さすがに平野謙は正面切った名指しを避け、ある作家が……という曖昧な書き方こそとっているものの、それが中河与一を指すものであることは、そのとき私にはピンときた。

一つの粒子を発見すると、それを契機に次から次へと新しい粒子があらわれた。掴みどころのない霧の中で、一つ一つの粒子が明らかに繋がっていることを私は知った。

平野謙は同じ全集第十三巻の中で、今度ははっきりそれと分る書き方で、ブラック・リスト事件について述べているのを私は見た。

〈略〉ブラック・リスト提供者と一作家とを結びつける具体的なデータについてはなにごとも語っていない。私もそのデータについては全く無知で、ただその作家が戦時中に主宰していた《文藝世紀》という雑誌の性格からみて、いかにもありそうな話だと類推するにすぎない。戦時中に左翼、リベラリスト、その他を三段構えに分けたブラック・リストを情報局に提出したというような一作家の行為は、美的にも倫理的にもみにくい。たとえその作家がどんなに哀婉な恋愛小説を書いたとしても、私はそれをそれとして認めることができない。(略)〈

ここで平野謙は一見穏当と思える言い方で、その一家が『文藝世紀』なる雑誌の主宰者であり、哀婉な恋愛小説を書いた作家だと書いてはいるが、それを知る人にはそれが中河与一を指すものであることは明瞭であった。『文藝世紀』の主宰者と言えは中河与一であり、哀婉な恋愛小説といえは『天の夕顔』を指すものであることは、誰の眼にもあきらかなことである。

しかし、私は依然として濃い霧の中にいるのを感じた。霧の中に佇立しながら、私はこの文章を読んで思わずどきりとする衝動を感じた。

私の頭の中にあの暗く狂気じみた戦争時代の光景が甦ってきた。戦争目的遂行のため国家それ自体が一種の狂気と化していた。人間も物量もあらゆるものが国家権力の下におかれていた。その頂点に有無を言わせぬ軍部が立って睨みをきかせていた。

戦争に反対する動きは根こそぎ弾圧された。文学もまたその例外にあることは許されなかったのである。そうした背景の下でのブラック・リスト事件。それはいかにもありそうなことのように思われた。

「あの温厚な中河先生が、まさか……」

そのとき私の頭の中に浮かんできた思いはそれだった。信じられない、と思った。